

その一言に込めた気持ち

小 六

「この人、目が不自由なのかな。」
一年前のことだ。一年生の時から習っているそろばんの帰り、母がむかえに来ていなかったので、自転車置き場で車を待っていた。

このそろばん教室の前は、私の通学路でもあった。歩道はせまく、車やバイクはよく通るので、危ないから気をつけてねと、よく母に言われていた。なかなかむかえに来なくて、少し心配になった。今日は少し早く終わったからだ。
少しすると、うすいむらさき色のサ

ングラスをかけたおじさんが、つえを地面にすり付けるようにして歩いて来た。私は、この人は目が不自由なのかなと思ったが、そんなに戸惑うことはなかった。

昨年、高い者疑似体験や、手話教室で「目の不自由な人について」ということを教わっていたためだ。そこではサングラスをしていることは教えてもらわなかったが、おじさんがつえについていたので、目が不自由なのだと思っただ。

私はその人のななめ前くらいで、「こんにちは。」と、あいさつをした。するとおじさんは、私の方は向かずに、でも笑顔で会しゃくして、

「元気だね。」

と言いつつ、またつえを器用に動かしながら歩いていった。A町にも目の不自由な人はいるんだ。でもここは危ないな。ちよつとした興味と心配な気持ちもあった。

母が迎えに来た。高れい者疑似体験や手話教室を通して、実際に会って話をしてみたいと好奇心で話しかけたが、そんな気持ちで話しかけていいのかなと思つたので、母には話せなかった。気が付けばそんなことは忘れていた。今年、福しの標語が入選したので、A町の福し大会に行ったとき私は大切なことに気付いた。それは、高校生による福しのためのエコキャップ集めなどのボランティア活動を行う部活動紹介

介を聞いていたときのことだ。

二人の高校生は、それぞれの家族に病気で亡くなったり、障害がある人がいたりした。そこで、人の役に立ちたいと願ひ、この部活に入部したそうだった。私は、一年前のことを思い出した。「そんな強い思いで人に接しているんだ。」と、少し自分が情けなくなった。

福し大会の帰り、高れい者疑似体験や手話教室で、何を学んだか考えてみた。高れい者疑似体験の先生が、「高れい者や障害者の人は、思いやる気持ちを持って優しく声をかけてもらえるだけでうれしい、とよく言っています。」と言つていたのを思い出した。私ははつとした。あの日の自分は、「この人、目

が不自由なの。」という興味本位で話しかけた。でも、逆の立場で考えると、どんなに良い言葉でも、軽い気持ちで言われるのはうれしくない。

この社会では、障害があるというだけであんな見を持たれることがある。けれど、それはちがう。みんな同じ人間であり、平等でなくてはならない。いつも、相手をいたわる気持ちを心の中にしまっておけば、自然と言葉に気持ちにはこもる。その一言にこもった気持ちは温かい。当たり前、でもとても大切なことを、この経験から学ぶことができた。